

VERSION JAPONAISE

岡本へ来てからほとんど病氣つづきで初めの六七年というものは、お正月が来ても、ただ息苦しい冬が、私を病いがちな家の中へ閉じ込めているというだけで、遠い街の彼方の方で、春めいた喜びの気色が動いているというのを感じることができませんでした。

そんなさびしいお正月をいく度も過したある年の暮れ頃から、私の心も身体も殆んど健康に近くなって、家のものがその喜びのために、倏に心が晴やかになって来たようでした。で、何年か食べられなかったおかちんを、このお正月には食べられそうだというので、急にいそいそとおかちんの用意をし初めました。

身体の回復と共に、心も快活になって来たましたが、身辺にも何か急に明るいきらびやかなものが欲しくなって、大きな模様の派手な春衣など着てよろこんでいたのを覚えて居ります。その年のお正月の、おかちんのおいしかったことは、不健康な時に食べたいろいろな珍味より、どれほどありがたかったかしれません。

私が五つ六つの頃、私を大変可愛がってくれた乳母と一緒に、田舎のお婆さんの家へお正月をしに行ったことがありました。

その頃乳母にはいい人が出来て、面目ないものですから、私を置いたままどこかへ行ってしまったのでした。で、私は大変悲しんで、いつも泣いてばかりいてお婆さんたちを困らせたものでした。

そのお正月に家の下男達が大きな凧を拵えて、後の原へ出て上げたことがありました。その時、その「凧」という字が、乳母が行ったという山の方へだんだん上ってゆき、乳母に別れた私のかたしい記憶を、新らしく甦らしてくれたのでした。

そして、乳母の居る山の方へ、少しでも近づきたいという子供心から、下男たちの油断を見すまして、その凧の糸を自分の腕に巻きつけ、そのために一間あまりも曳きずられて気絶したことがありました。

この幼ない時分の、かなしい凧の記憶と共に、六七年ぶり食べたあのおかちんのおいしかったことを、いつもお正月になる度になつかしく思い出しているのをごさいます。

おかちん=餅 (もち)

岡本かな子

「おかちんの味」

(1927)